

NEWSLETTER

～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
- ◆ アクティブラーニング部門活動報告
 - ・ アクティブラーニング型授業モデルの開発 (p.1)
 - ・ ワークショップの開催(p.4)
 - ・ アクティブラーニングのための冊子・ツールの開発(p.6)
- ◆ お知らせ(p.7)
 - ・ 動画コンテンツのお知らせ
- ◆ 今後の活動予定(p.7)
- ◆ アクティブラーニング部門とは？ (p.7)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングはKALS（駒場アクティブラーニングスタジオ、東京大学駒場キャンパス17号館2階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングを取り入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。本ニュースレターをお読みになり、気になる記事がありましたら、アクティブラーニング部門までお問い合わせください。（星埜）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことでです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中で読解・ライティング・討論など、学生が中心にな

って行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（星埜）

◆ アクティブラーニング部門活動報告

2021年度後半のアクティブラーニング部門の活動を紹介します。

アクティブラーニング型授業モデルの開発

アクティブラーニング部門では、授業の開講を通して、アクティブラーニング型授業のモデル開発や試行を行っています。

2021年度Aセメスターは、5授業を開講しました。各授業の概要やアクティブラーニング型授業モデルについて得られた知見を簡単に紹介します。

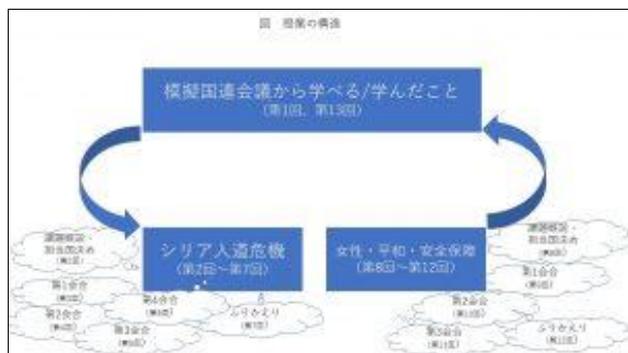
(1) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 II

「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 II」（担当教員：星埜守之・中村長史）では、模擬国連（Model United Nations）というアクティブラーニングの手法を用いて、国際問題の解決法を考えました。多様な利害・価値観に配慮することの重要性を理解するには体感してみることが早道ですが、模擬国連の会議では、一人一人が米国政府代表や中国政府代表などの担当国になりきって国際問題について話し合います。立場を固定されている点ではディベートと同様です。しかし、相手を論破することで勝利を目指すディベートと異なり、模擬国連会議では合意形成が目的であるため相手の利害・価値観を尊重したうえでの妥協が重要になります。この点を重視し、授業内では対立の激しい議題・担当国を設定して、ロールプレイ・シミュレーションに取り組みました。

授業は、2部構成としました。第1部「シリアの人道危機」（第2～7回）では、2010年代を通して続い

ているシリア人道危機についての国連安全保障理事会のシミュレーションを行ないました。第2回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第3回から第6回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国（シリア政府擁護派）、フランス（シリア政府批判派）、ロシア（擁護派）、英国（批判派）、米国（批判派）の5つの常任理事国に「中間派」の南アフリカを加えた6ヶ国を設定し、1ヶ国を1・2人で担当しました。現実の会議と同様、拒否権が行使され、決議案は廃案となりました。

第7回では、まず、このような会議の内容について、担当国の立場から振り返り、自国の利益をどの程度反映できたか、より適切な政策立案・議論・交渉等はなかったかを検討しました。そのうえで、個人の立場から会議を振り返り、国際社会全体の利益のために、どのような方法があり得る（た）のかを議論しました。2つのふりかえりを踏まえて、受講者は授業外でレポート1に取り組みました。



授業の構成

第2部「女性、平和、安全保障」（第8～12回）では、「テーマ別会合」（国連安全保障理事会では、シリアのような特定の事態のみならず、「テーマ別会合」と呼ばれる一般的な議題も扱われます）の一つである「女性、平和、安全保障」のシミュレーションを行ないました。第8回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第9回から第11回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国（現実世界では棄権）、フランス（賛成）、ロシア（棄権）、英国（賛成）、米国（賛成）の5つの常任理事国にドイツ（賛成）、インドネシア（賛成）を加えた7ヶ国を設定し、1ヶ国を1人で担当しました。多様な文化・宗教・利害を持つ国々の間でリプロダクティブヘルス/ライツや、安保理で人権問題を話し合うことの是非等をめぐって議論・交渉が繰り広げられましたが、現実世界とは異なり、全会一致で決議案が採択される結果となりました。第12回では、シリアの際と同様、担当国の立場と個人の立場から、それぞれふりかえり、授業外でレポートに取り組みました。

朝鮮半島情勢が、地域安全保障への危険で大規模な影響を与え得ることへの重大かつ深刻な懸念を強調し、⁶²
 国際連合憲章第7章の下で行動し、同意章第41条に基づく措置をとって、⁶³
 1. DPRKが、安全保障理事会の決議に違反し、甚だしく無視して、2017年9月2日に核実験を実施したことを最も強い表現で非難する。⁶⁴
 2. DPRKが、弾道ミサイル技術を使用したいかなる発射、核実験又はその他のいかなる挑発もこれ以上実施せず、弾道ミサイル計画に関連する全ての活動を直ちに停止し、またこの文脈において、全てのミサイル発射モトリウムに係る既存の約束を再確認し、全ての核兵器及び既存の核計画を、完全な、検証可能な、かつ、不可逆的な方法で直ちに放棄し、全ての関連する活動を直ちに停止するとともに、その他のいかなる既存の大量破壊兵器及び弾道ミサイル計画を、完全な、検証可能な、かつ、不可逆的な方法で放棄すると決定を再確認する。⁶⁵
 3. 決議第1718号（2006年）8（d）の規定に定める措置は、この決議の附属書1及び目録に記載される個人及び団体、それらの代理として又はそれらの指示により行動するいかなる個人又は団体並びにそれらにより所有され又は管理される団体（不正な手段を通じてのものを含む。）にも適用されることを決定するとともに、さらに、決議第1718号（20

採択された決議案の一部

第13回のまとめでは、各自が模擬国連から学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「過去の議事録や決議案の中で表出される国家間の利害関係・外交関係や、行動の裏にある政治的意図の汲み取り方を学んだ」、「国際社会には多様な立場、考え方があり、そうした違いを埋めるのが大変であるということを知った。特に最初のシリア問題をめぐる議論では、各国の間に『埋められない溝』があるように感じ、利害調整をすることの難しさをひしひしと感じた」、「国連で革新的な決議を採択することの難しさを学び、どうして会議が進まないように見えてしまうのかがわかった」、「利害対立する国々同士で合意形成、妥協点を見出すことの難しさを実践的な経験として学ぶことができた。相手の立場を理解して交渉にあたるのが重要だと感じた」、「同じ問題に対する他の国の意見を知ることができるため、なぜその問題が解決されないのか、なかなか議論が前に進まないのか、など問題の裏事情も含めて知ることができる」といった感想が寄せられました。これらの感想ならびにレポートの内容から察するに、授業の目的が一定程度達成されたようであり安堵しました。（中村）

(2) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 国際紛争ケースブックをつくろう

「国際紛争ケースブックをつくろう」（担当教員：星埜守之・中村長史）では、複数の国際紛争の経緯や構図、原因等についてグループで調査し、最終的にケースブックを作成することを目指しました。その過程で、ある国際紛争に対する見方は決して一様ではないことに気づき、できる限り客観的に各紛争を捉えるための方法を習得してほしいと考えました。担当する紛争の5W1H、すなわち主体（who）、争点（why）、時期区分（when）、民族・宗教・政治体制・経済状況（where）、当事者・第三者の行動（what&how）について正確に理解するために複数の文献・資料にあたって丁寧に情報収集をするのはもちろんのこと、他の紛争を担当するクラスメイトとの意見交換を通じて、紛争間の関係性や前例が後例に与える影響についても学ぶことを期待しました。

授業は、2部構成としました。第1部「ケースブックの改訂」（第2～7回）では、いきなりケースブックをゼロから作ることは難しいので、まずは練習として、昨年度を受講生が作成したケースブックの改訂から始めることにしました。コソボ、イラク、シリア、イエメンの4つの紛争を扱うグループに分かれ、グループ内・グループ間のディスカッション、教員・TAからのフィードバックを繰り返し、ケースブックの改訂を進めていきました。第7回では、グループごとに、その最終成果を報告しました。

<p>【第1部 ケースブックづくりから学ぶこと】</p> <p>第1回(9/28)ガイダンス</p>	<p>【第2-2部 ケースブックの作成】</p> <p>第8回(11/30)作成作業・中間報告①</p> <p>第9回(12/7)作成作業・中間報告②</p> <p>第10回(12/14)作成作業・中間報告③</p> <p>第11回(12/21)作成作業・中間報告④</p> <p>第12回(1/4)作成作業・最終報告</p>
<p>【第2-1部 ケースブックの改訂】</p> <p>第2回(10/5)改訂作業・中間報告①</p> <p>第3回(10/12)改訂作業・中間報告②</p> <p>第4回(10/19)改訂作業・中間報告③</p> <p>第5回(10/26)改訂作業・中間報告④</p> <p>第6回(11/2)改訂作業・中間報告⑤</p> <p>第7回(11/9)作成作業・最終報告</p>	<p>【第3部 ケースブックづくりから学んだこと】</p> <p>第13回(1/7)総括</p>

授業の構成

第2部「ケースブックの作成」（第8～12回）では、改訂作業で学んだことを踏まえて、ケースブックをゼロから作る段階へと入っていきました。カンボジア、ミャンマー、ソマリア、エチオピア、ニカラグア、チェチェン、ナゴルノ・カラバフ、ウクライナの8つの紛争を扱うグループに分かれ、グループ内・グループ間のディスカッション、教員・TAからのフィードバックを繰り返し、その最終成果を第12回で報告しました。改訂作業の段階に比べて、事例（紛争）間の関係にも目を向けるグループが多くなるなど、確かな成長が感じられました。

なお、第11回には、富田早紀氏（The Global Fund to Fight AIDS, Tuberculosis and Malaria; 元国際移住機関[IOM]; 本学国際関係論 OG）がゲスト講師としてお越しください、国際機関での実務について紹介してくださいました。国際機関に研究・キャリア上の関心を有する学生が多くいることもあり、活発な質疑応答がなされました。

第13回のまとめでは、各自がケースブックづくりから学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「ケースブックを作り、具体例から学ぶことで、これまで学んできた理論について主体的に考えることができたと思います」、「いざ文字起こししようと思うと、論文等を読んでいた段階では気づかなかった疑問が湧いてきて、それについてまた調べるといった具合に、自分自身で学習を深めることができるため、学習効果はとても高いように感じた」、「イラクのケースブックを改訂したのですが、国際情勢の流れの中で形作られた紛争という私を持っていたイメージとは異なる内的要因に触れるきっかけにもなりました。受動的に習うだけだとどうしても得られる知見が偏ってしまうので、自ら分析し、多面的に考察していくという意味でもケースブックを作るのは有益だと思います」、といった感

想が寄せられました。二度目の開講となりましたが、所期の目的が一定程度達成されたものと安堵するとともに、2022年度Aセメスターに向けてさらなる改善を図っていきたいと考えています。（中村）

(3)全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 働きがいやジェンダーを考える

「働きがいやジェンダーを考える」（担当教員：星埜守之・伊勢坊綾）では、学生の興味関心に基づき、働きがい、働く上でのジェンダーの問題に関する論文や文献を輪読し、ディスカッションを行いました。本授業で扱う文献は、興味関心に沿って学生自ら選定し、教員と相談の上、決定しました。2021年Aセメスターは、母性愛や女子力と言った言説、化粧、カミングアウト、更年期障害等の文献を取り扱いました。履修者の多くが男性性に興味関心を持っていたことから、Sセメと同様、ジェンダー、男性性研究者である川口遼氏（東京都立大学子ども・若者貧困研究センター特任助教[講演当時]）に、『What Gender Studies Do』、『男性学/男性性研究とは何か』というタイトルで、二度講演していただき、理解を深めました。

Sセメに引き続きAセメもオンラインで開講しましたが、中盤になると状況的に対面授業も可能となったため、対面受講を希望する受講生はKALSで授業を受けました。授業は、ハイブリッド形式で実施しましたが、その際、教室全体を映し出せる広角カメラを設置し、オンラインで受講している学生にもその様子を見てもらえるようにしました。また、Sセメ同様に、各グループのディスカッション内容は、Googleドキュメント上で共有し、他のグループでどのような意見がでているのか、履修者全員が確認できるようにしました。

オンライン受講の学生からは、教室で参加している学生の様子を動画で、ディスカッションの内容をGoogleドキュメントで知ることが出来るので、より一体感が生まれると声があり、教室内の学生の様子が見えることの効用を感じました。また、教室内の様子を知ることでも自分も教室で受けてみたいと思うようになり、対面での参加に変更する学生も増えてきました。

ハイブリッド形式の授業では、オンライン受講生と対面受講生の間で、教室内の状況に関する情報にどうして差が生まれてしまいます。しかし、このように、教室内を映し出せるカメラを設置するだけでも、オンライン受講生にとっては、効果があるようです。ハイブリッド形式の授業を実践される先生方は、一度、お試しいただければと思います。（伊勢坊）

※ 伊勢坊特任助教は2022年3月末で転出いたしました

(4) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 「オープン教材」をつくらう!

「『オープン教材』をつくらう! (担当教員: 中澤明子) は、Sセメスターから引き続いて開講しました。本授業では、まずオープンエデュケーションやオープン教材の定義・特徴・事例に加えて教材設計理論を学びます。その後、オープンエデュケーションやオープン教材について学べる教材を作り、オープンエデュケーションやオープン教材についての理解を深めるという授業です。

13回の授業終了時、受講生にアンケート調査を行いました(回答者15名)。授業前半のオープンエデュケーションやオープン教材の定義等に関する授業と、授業後半の教材設計書・教材づくりがそれぞれオープンエデュケーションについて理解するのに役立ったかどうか(とてもあてはまる～まったくあてはまらないの5件法での回答)については、11名が「とてもあてはまる」、4名が「ある程度あてはまる」と回答しました。また、教材づくりがオープンエデュケーションへの理解を深めることに対する感想として「とても役立ちました。実際にオープンエデュケーションについてのオープン教材を作成する中で、改めて授業で学んだ内容を振り返ったり、それでも理解しにくいところは自分で調べて考えたりできました」、「話を聞くだけではあまり頭に入りませんし、すぐ忘れてしまうと思うので、実際に教材を作ってみるというのは定着するという意味で役に立ったと思います」といったものが見られました。これらはSセメスターの感想とも共通しており、教材づくりを通じた理解が示唆されます。

Sセメスターと異なるのは、授業後半で行う教材づくりを対面授業で行った点です。対面授業の際は、オンラインで参加する学生もおり、ハイブリッド授業(教室とオンラインとで同時に授業を進行)を実施しました。とりわけ、グループワーク、グループディスカッションをハイブリッド授業で行うには工夫が必要でしたし、ネットワーク不調で学生がコミュニケーションとれないといったこともありました。そのため、対面(教室)とオンラインとでコミュニケーションがとりにくいといった声が見られました。ハイブリッド授業でアクティブラーニング型授業をどのように行うかについては、今後の検討課題になると考えられます。(中澤)

(5) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 未来の学びを考える

「未来の学びを考える」(担当教員: 中澤明子)では、教育・学習について過去や現在の状況を理解した上で、10年後の未来の学びがどうなるかを自分なりに考えること、そしてその過程で自身の教育・学習経験をふり返って教育・学習の理論に位置づけることを目的としました。第2回～第5回の授業では、教育・学習の理論やトピックの資料を扱い、ジグソー法で読解・相互説明した後、問いについて議

論しました。第6回～第8回の授業では、学びの事例を知ることテーマに、学校現場の先生や研究者によるゲスト講義を行いました。第9回では自身の教育・学習に関する経験を、ブロックを使って可視化して相互に説明した後、それまでの授業で扱ったトピックや事例との関連づけを行いました。その後の授業では、グループでの議論や最終発表を行いました。第9回以降は対面授業、それまではオンラインで授業を行いました。

この授業では、ジグソー法の活用と、ブロックによる経験の可視化と相互説明などを行いました。Sセメスターのほかの授業でもジグソー法で授業を行いました(参照 <https://dalt.c.u-kyo.ac.jp/tips/almethod/a2873/>)。その経験を踏まえて、授業時間内にジグソー法を行う授業回と、資料の読解を事前に行う授業回を設定して実施しました。事前に資料を読んだほうが議論の時間を多くとることができた一方、事前に資料を読むことに負担を感じる学生もいました。ブロックで作品をつくり説明し合う活動については、AL NEWSLETTER Vol.7, No.4

(<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/download/a3285/>)で詳しく紹介していますのでご覧ください。

13回の授業終了時、受講生にアンケート調査を行いました(回答者12名)。ジグソー法で行った授業(第2回～第5回)が教育・学習に関するトピックの理解に役立ったか(とてもあてはまる～まったくあてはまらないの5件法での回答)については、8名が「とてもあてはまる」、4名が「ある程度あてはまる」と回答し、ゲスト講義が教育・学習の事例の理解に役立ったかについては6名が「とてもあてはまる」、6名が「ある程度あてはまる」と回答しました。また学生からの感想では、「一番受講者と活発な議論を交わせた授業でした。その理由を考えるに、ジグソー法を用いることによって各人が半ば強制的に役割を与えられ、発言する必要性があったこと、対面でのディスカッションやグループ発表が設けられていたことによって、目標に向けて協力し合うベースが作られていたことなどがあるかなと思いました。主体的に取り組めたおかげで、授業内容もよく身についたと思います。」、「ディスカッションやグループ活動は、ここまで濃い授業は他に全然なかったもので、とても楽しく印象に残っています」、「大学に入って初めて講義形式ではない授業を受けられたことがとても印象的でした。」といったものがありました。ジグソー法やグループでの発表を取り入れたことで、ディスカッションが活発に行われ、内容の理解に寄与できたことが窺えます。一方で、グループディスカッションの役割分担については改善点も挙げられているため、今後の検討課題にしたいと思います。(中澤)

ワークショップの開催

学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワークショップを企画しています。

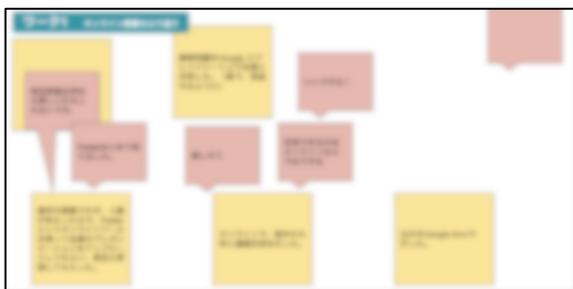
2022年3月、次の2つのワークショップを開催しました。これらについて簡単にご報告します。なお、詳細については、部門 web サイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/event/>) をご覧ください。

オンラインワークショップ「オンラインでこそアクティブラーニング：オンライン授業の経験から対面授業を考える」(2022年3月9日)

東大で授業を担当されている先生方を対象に、オンラインワークショップ「オンラインでこそアクティブラーニング：オンライン授業の経験から対面授業を考える」を開催しました。当日は15名の方が参加されました。

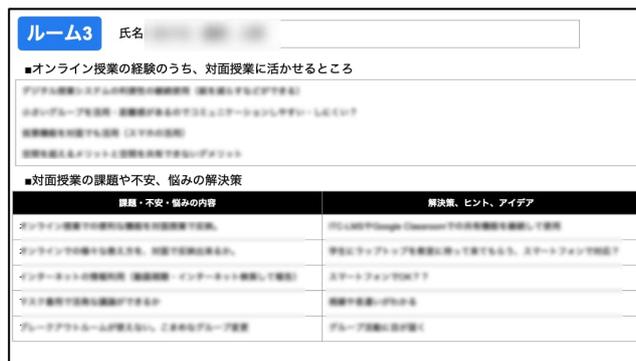
本ワークショップでは、オンライン授業の経験に基づいて、対面授業をアクティブにするための授業設計や運営について検討しました。ご自身のオンライン授業の取り組みを振り返りほかの参加者と共有した後、授業デザインの基礎や授業をアクティブにする際のポイント・留意点を確認した上で、対面授業に活かせる要素や手法などについて議論し、対面授業に活かしてもらうことを目的としました。

趣旨説明の後、参加者はグループ(ブレイクアウトルーム)に分かれて互いの自己紹介とワークに取り組みました。ワークでは、オンライン授業の振り返りとして、「満足した取り組み」、「手応えがあった取り組み」、「課題の解決方法」を書き出し、ほかの人と共有して相互にコメントを行いました。



オンライン授業の振り返りのワークシート

休憩を挟んだ後半は、対面授業について考える手がかりをミニレクチャで伝えました。ミニレクチャでは、一般的な授業デザインの流れを説明した後、アクティブラーニングを取り入れる際のポイントとして、インプットとアウトプット、個人とペアやグループの学習活動のサイクルを回すことを紹介しました。また、アクティブラーニング型授業の進め方の例や、オンライン授業・対面授業・ハイブリッド授業の違いやハイブリッド授業の実施のポイントを説明しました。その後、二つ目のワークとして、「オンライン授業のうち、対面授業に活かせるところ」、「対面授業の課題や不安、悩みの解決策」を個人とグループで考え議論しました。



対面授業について考えるワークシート

最後に全体で議論内容を共有しました。また、個人でワークショップの振り返りとして、ワークショップで新しく知ったことや気づいたことを「五・七・五」で表現してもらいました。

参加者からは、「ヒントになる内容が多い」、「ワークがあり、アウトプットしながら進めることができた」、「他の分野の方と交流できたお陰で、自分の授業計画を十分に振り返ることができた」、「不安が緩和しました」といった感想をいただきました。一方で、グループワークの時間が短いことや、ツールの操作説明の仕方といった改善点も挙げられました。ワークショップで使用したツールやワークのルールに戸惑われた方もいらっしゃったため、今後のワークショップデザインや運営で改善していきたいと思います。(中澤)

第4回模擬国連ワークショップ(2022年3月18日)

本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成」を踏まえて開催したものです。学内外の大学・高校教員を対象として2019年度から実施しており、今回が4回目となりましたが、58名の参加者が画面越しに集いました。

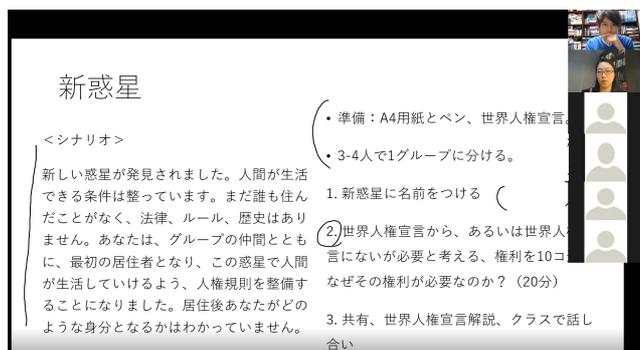
ワークショップは2部構成としました。セッション1「模擬国連導入事例から学ぶ」では、模擬国連の概要と本学教養学部の授業への導入例について中村からお話しました。導入目的を明確化する必要があるという点を再確認する機会となりました。

1.3. 模擬国連の事例(東大教養学部)



セッション1の様子

セッション2「ロールプレイ導入事例から学ぶ」では、小林綾子先生（上智大学総合グローバル学部）から、模擬国連以外のロールプレイ手法について、人権について学ぶワークショップ形式の授業を具体例としてご紹介いただきました。模擬国連はあくまでも手段であるため、授業の目的により適したロールプレイがあれば、それを学ぼうという趣旨でしたが、模擬国連との異同を意識した小林先生のお話のおかげで、模擬国連の特徴を改めて確認する機会となりました。



セッション2の様子

参加者からは、「Taylor-made の模擬国連という考え方を教わったことで、授業にどのように模擬国連を取り入れたいのか、自分なりに考えることができるようになった」、「模擬国連以外の方法も学んだことで、自分のやりたいこと（目的）を達成するためには必ずしも模擬国連だけが最適の方法ではない、ということもわかりました」といった声をいただきました。一方、「模擬国連の授業を受講している学生の声も聞いてみたい」といった声もありましたので、次回以降はそうした機会も改めて設けたい（第1回・第2回では設けていました）と考えています。

当日の様子は、後日「東大TV」にて公開される予定です。ぜひご覧ください。（中村）

アクティブラーニングのための冊子・ツールの開発

アクティブラーニングを導入されたい、よりよい授業にされたいと考えられている先生方に活用していただけるよう、新たに冊子やツールを開発し、部門ウェブサイトでの配布を開始しました。今回開発した冊子・ツールを紹介します。

(1) オンラインでもアクティブラーニング

オンライン授業でのアクティブラーニングについて、部門ウェブサイトやニュースレター、ワークショップなどで発信した内容を中心にまとめており、この2年間のオンライン授業に関する当部門の取り組みを集約した内容になっています。本冊子は、第一部と第二部に分かれています。

第一部：授業をアクティブにする授業設計と運営

第一部では、授業形態を問わず授業デザインの基本的な考え方や授業をアクティブにする授業デザイン、オンライン授業をアクティブにするポイント、オンライン授業でのTA（Teaching Assistant）を掲載しています。

第二部：オンライン授業でのアクティブラーニング手法と実践

第二部では、アクティブラーニング手法について、実際にオンライン授業で行う際の手順や注意点、実践してみた感想を掲載しています。

本冊子は、オンライン授業に焦点をあてていますが、対面授業でも活用可能な内容が盛り込まれています。ダウンロードはこちらのURLより行っていただけます。<https://dalt.e.u-tokyo.ac.jp/download/a3316/>（中澤）



冊子「オンラインでもアクティブラーニング」の表紙

(2) アクティブラーニングのための授業デザイン確認シート

授業デザインの考え方に基づいたポイントや、アクティブラーニングを導入する際のポイントを確認できるシートです。授業デザイン前・中・後、授業後のタイミングにわけて、質問に答える形式あるいはチェックリストの形式で確認できます。シートは、表裏面のA4サイズ1枚PDFの形式ですが、入力できるように設定しているため、パソコン上でも使用いただけます。ダウンロードはこちらのURLより可能です。<https://dalt.e.u-tokyo.ac.jp/download/a3321/>（中澤）

アクティブラーニングのための授業デザイン確認シート

このシートの使い方
この授業デザイン確認シートはシラバス作成前や授業準備段階で使います。「授業をつくる前」「授業をつくりながら」「授業をつくった後」に、授業を進めてからのそれぞれのタイミングで質問事項について考えて記入してみてください。アクティブラーニングのための授業デザインを進めたい、アクティブラーニングの観点から、自身の授業デザインや授業そのものを点検できます。

授業をつくる前

① コース(13回の授業全体)で学生たちが到達する学習目標はなんですか？

② コース(13回の授業全体)で学生たちが学習目標に到達したかどうかをどうやって確認しますか？

③ コース(13回の授業全体)で、学習目標はどのようにして到達できるでしょうか？

④ 授業をうける学生たちは、この授業に関連するどんな知識をどの程度持っているでしょうか？
どんなことに興味関心があるでしょうか？

授業をつくりながら
学習目標にどうやって到達するかを考えると、次のことを意識してみてください。

① 何をどうやってInputしますか？

② 学生は何を考えますか？

③ 学生は何をどうやってOutputしますか？

④ 学生一人での学習活動とペア/グループでの学習活動をどのように取り入れますか？

授業をアクティブにする授業デザインのポイント
・Input, Transform, Outputのサイクルを回す
・学生一人での学習活動とペア/グループでの学習活動のサイクルを回す

授業デザイン確認シートの表面

(2) アクティブラーニングの部屋

音声プログラム「アクティブラーニングの部屋」を作成し部門ウェブサイトで公開しました。<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/tips/online/a3310/>

部門ウェブサイトやニュースレターなどを通じてアクティブラーニングに関する情報を発信してきました。また、ワークショップを開催し、多くの教員の皆さまからご質問・ご意見を承ってきました。様々な情報発信・共有をしてきたつもりではありますが、十分にお答えできていない点やお伝えしきれない点があります。そうした点をお伝えするための試行として今回公開しました。

第1回の音声プログラムでは、この2年間のオンライン授業をふり返り、苦勞した点やうまくいった点、対面授業に活用できる点をアクティブラーニング部門の特任教員3名でお話しています。ぜひ、ラジオのような感じでお聴きください。(中澤)

◆ お知らせ

動画コンテンツのお知らせ

アクティブラーニング部門が作成したアクティブラーニング手法に関する動画や、ワークショップの動画を公開しています。ぜひご覧ください。

- 映像で見るアクティブラーニング
<https://today.tv/contents-list/2015FY/komex>
- 模擬国連ワークショップ
<https://today.tv/contents-list/2019FY/MUN/session-3>
- 第2回 模擬国連ワークショップ
<https://today.tv/contents-list/2020FY/MUN2>

◆ 今後の活動予定

2021年度Aセメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。また年度末に再びワークショップを開催する予定があります。オンライン授業や部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>) で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。ワークショップへの参加もお待ちしております。

◆ アクティブラーニング部門とは？

アクティブラーニング部門は学部教育を教育工学の視点から支援することを目的として、2010年度に教養教育高度化機構に設置されました。その活動内容は、教養学部・情報学環・大学総合教育研究センターの共同プロジェクトとして2007-2009年度に実施された文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「ICTを活用した新たな教養教育の実現-アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデル構築-」を継承し、発展させています。また、全国の教育機関や教育関連の企業からの見学を受け入れており、アクティブラーニングの実施モデルとしての役割も果たしています。

(奥付)

- 発行年月日：2022年7月6日
- 発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門
星埜守之・中澤明子・中村長史
- 連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
- Webサイト：https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/